

伊藤若冲の絵に込められたものとは何か

一時を経て評価される理由を探る

抄 録

江戸中期の絵師、伊藤若冲は300年の時を経て評価され人気を集めている。しかし、まだ広く認知されているとは言えない。そこで若冲の生涯や作品について調べると、高度な技術と並外れた労力を使って斬新な絵を描き、寺に奉納した僧であると分かった。またアンケート調査により、同時代の他の絵師より知名度が低いことも明らかになった。このことから、それは様々な意味で彼が大勢に属さなかったことが要因ではないかと考察した。一方で、彼の因習に囚われず自分を見失わない姿勢が現代の人々を魅了しているとも考えられる。

キーワード：伊藤若冲，江戸絵画，京都

1. はじめに

2016年は若冲生誕300年に当たり全国各地で若冲展が開催されメディアにも多く取り上げられている。そのような特集番組を見て若冲を初めて知り、大胆な構図と鮮やかな色彩の作品に感動した。その一方で、このような偉大な絵師を知らなかったことに疑問を持った。尋ねてみると周囲にも若冲を知らない人が多くいた。それほど知名度は高くないのだろうか。そうであるならそれは何故なのだろうか。

2. 研究目的

そこで本論文では、若冲の生涯や作品を調査し、若冲がどのような存在だったのか、江戸時代から現在に至るまで彼の絵がどのような評価を受けてきたのかを明らかにする。また、江戸時代の他の絵師と比較して無名であるのは事実なのかを調べ、その理由を考察する。加えて、若冲の絵が現代人を魅了する理由も考察する。

3. 研究方法

若冲の作品が掲載、解説されている雑誌や専門書を読んだり、若冲展を訪れたりして情報を集め、若冲の生涯・作品・絵画技法を理解し、若冲の江戸絵画におけるポジション・若冲自身の精神のあり方・若冲作品の評価の変遷を探る。

また、若冲の知名度を調査するために、大阪教育大学附属天王寺中学校3年生（158名）を対象に江戸時代の絵師と若冲についてのアンケートを実施する。池大雅・伊藤若冲・歌川広重・尾形光琳・葛飾北斎・酒井抱一・狩野探幽・俵屋宗達・円山応挙の9名の絵師の名を挙げ、それぞれについて江戸時代の絵師として認識しているか、歴史や美術の授業で習った記憶があるかを尋ねる。そして、改めて伊藤若冲を知っているか、いつどのようなきっかけで知ったのか、若冲の代表作『動植綵絵』の中の『群鶏図』の一部（図1）を見せて今までに見たことがあるか、見てどのような感想を持ったかを質問する。

そして、筆者自身が若沖の用いた技法で日本画を描く体験をし、若沖の絵の魅力がどこにあるかを探る。

4. 研究結果

4.1 江戸絵画史の流れと若沖のポジション

江戸時代の絵画文化は17世紀の京都・18世紀の京都・19世紀の江戸と、栄えた時期と場所により前期・中期・後期に区分される。そして前期に元禄文化の時代が、後期に化政文化の時代が含まれる。中期は中国の南画が京都にもたらされたこと、寺社にある美術資産を手本に利用できたことで、京都で絵画文化が大きく発展し、そこに若沖は存在した（西田, 2007, p.4）。



図1 動植綵絵（群鶏図）

4.2 若沖の生涯と作品

若沖は京都の青物市場の裕福な問屋に生まれたが、絵を描くことにしか興味を持っていない人間だった。一旦は狩野派の弟子になるが、その後やめて自己流の絵師になる。中国画の横写を鍛練した後、観察と写生を始める。相国寺の僧大典と文化人の売茶翁に絵を描く応援を受け、彼らは若沖にとって生涯の師匠であり友人である存在となる。そして彼らの影響もあり若沖自身も仏教に帰依する。40歳で家業を弟に譲り、『動植綵絵』30幅を描き、相国寺に奉納した。この作品は若沖の代表作となり、明治時代には相国寺から皇室に寄進された。版画や水墨画にも秀で襖絵や障壁画や屏風なども手掛けた。当時の京都人気絵師投票で2位になるほどの評価の高い絵師となった。しかし70歳以後、京都の大火で家が全焼し、その上大病にかかり困窮する。京都石嶺寺の傍に隠居し、絵を描き石像を彫り晩年を過ごした（加藤, 2011, p.8, 10, 24, 56, 74）。

2016年8月に若沖展を開催していた京都の細見美術館と相国寺承天閣美術館を訪れた。美術雑誌やテレビ番組でも取り上げられているように、総じて保存状態が良い作品が多かった。また、宮内庁や寺院が収蔵している作品および個人蔵の作品が多かった。

4.3 若沖の絵画技法

若沖には自らが開発した特別な絵画技法がある。その一つは羽や花卉などのパーツを線や点で幾何学模様のように描く技法（図2）で、その細かさは拡大して初めて肉眼で確認できるレベルである。また、効果を計算して層を重ねて色を塗る「重ね塗り」（図3）や絵を描く絹の裏側から色を付け表から見た時の効果を上げる「裏彩色」（図4）、日本で最初に光を浴びた影を描いた「陰影」などの技法がある（NHK, 2016）。

さらに、絵を細かい正方形に分割しその柁目1つ1つを2,3色で塗り分ける「柁目描き」、淡い墨を隣に置いた時に境界に白い筋ができることを利用して模様を描く「筋目描き」などの手法も使っている。そして、0.1mm大の顔料の粒子を絵に乗せ絵を見た人の脳内で混色させるなど色へのこだわりが見られる（NHK, 2016）。



図2 パーツの模様



図3 重ね塗り

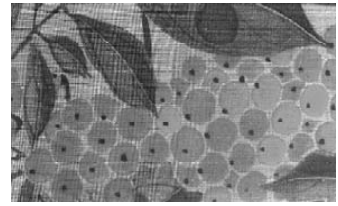


図4 裏彩色

膠絵具や水墨などを用意し、私自身が若沖の絵画技法を再現しようと試みた（吉田, 2016, p.60）。その結果、高度なテクニックとセンスを要求される上に、労力が相当必要であることが分かった。特に彩色画の場合、1つの絵を仕上げるのにどれだけの時間をかけるのか想像がつかないほど、繊細で精緻な工程が積み重なっていることが分かった。若沖が非常に細かい作業を納得いくまで徹底して行っていたことを知り、商売で絵を描く絵師とは対極の立場にいる絵師だと理解した。

4.4 若沖の知名度

アンケート調査の結果、回答率は74.7%で、若沖を知っていた人は15.3%、最近テレビ番組や美術ポスターなどを見て若沖を知ったという人が多かった。『群鶏図』を見たことがあった人は8.5%、初めて見た人がほとんどだったが、迫力がある、色鮮やか、生き生きしているなど概ね高評価だった（図5）。

江戸時代の絵師と認識されていたのは歌川広重・尾形光琳・葛飾北斎・俵屋宗達で、習った記憶がある人も多かった。一方、池大雅・伊藤若沖・酒井抱一・狩野探幽・円山応挙は認識率が低く、習った記憶がある人も少なかった（表1）。この9名の絵師のうち、江戸絵画文化の前期に活躍した人は尾形光琳・狩野探幽・俵屋宗達、中期は池大雅・伊藤若沖・円山応挙、後期は歌川広重・葛飾北斎・酒井抱一であり、中期の絵師の認識率や習った記憶のある割合が総じて低いことが分かった。

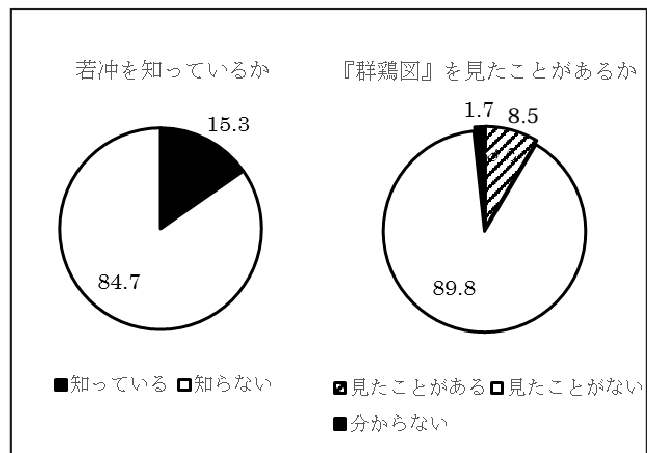


図5 アンケート結果

表1 江戸絵師9名の認識率と習った記憶のある人の割合

時期	前期			中期			後期		
	光琳	宗達	探幽	若沖	応挙	大雅	北斎	広重	抱一
認識率	55.9%	44.1%	2.5%	8.5%	4.2%	1.7%	89.0%	85.6%	0.8%
習った	91.5%	74.6%	14.4%	10.2%	5.1%	1.7%	97.5%	95.8%	4.2%

若沖を知っていると答えた割合15.3%は、授業で習って知っている人が95%以上の葛飾北斎や歌川広重とは差が顕著であり、若沖の知名度が低いことは確かなようである。

4.5 若沖人気はいつからか

若沖が近年になって注目されている経緯を調べた。2000年に京都国立博物館で開催された没後100年記念展が世間の注目を集めたきっかけだと言われている。この時の副題が「若沖、こんな絵描きが日本にいた」だったことで、それ以前はあまり知られていなかったことがうかがえる。さらに遡ること30年、1970年頃に出版された美術評論本『奇想の系譜』の影響で美術館が若沖に興味を示すようになり2000年に若沖展が企画された（花塚、2010、p.138）。それ以前で若沖が注目されているという記述は見られない。

また、第2次世界大戦後、アメリカのジョー・プライス氏が個人的に若沖の絵を気に入って収集を始め、1980年代頃から絵の魅力を世界に伝えてきたことも今の若沖人気につながっている（花塚、2010、p.68）。

つまり、若沖の評価の変遷は次のようになる。若沖生存中は、「神の手を持つ男」と絶賛される人気絵師だったが、没して後2000年までは注目されることなく、知名度の低い人物となった。そして2000年以降人気が出て、現在では現代アートに通じる先見性と技術を持った逸材と評価されている。

5. 考察

5.1 若沖とはいかなる人物か

若沖は絵の研究者であり、絵を通して仏に仕える修行僧である。絵は仏に奉納するために描き、私欲のための金銭は稼がない。流派に属さず、絵への情熱のままに自分が納得できる絵を描き、そのための絵画技法を開発した。観察眼鋭く、精緻に写生するかに見せて、若沖自身の理性や感性で絵の構図や色彩を変換し、独特の絵を描いた。そして争い・被災・大病を体験して得た諸行無常の思いを絵に託した。

若沖は形式にこだわらず、自分の信じた道を自分の力で進んでいく絵師であり、絵画技法が独創的なだけでなく、しきたりや派閥や門下生などの概念を覆してすべてを自己流で行った。若沖の自由さと自己流の創造力のレベルの高さは江戸時代の随分先を進んでいたと言わざるを得ない。

若沖は「千載具眼の徒を埃つ」つまり千年後に理解されるまで待つという言葉を残した。美術の専門家は若沖の技術や絵の価値が理解されるまで時間がかかるという意味に解釈しているが、私は若沖が他の意味を込めていると考える。一つは、若沖が得た仏の教えを絵に託して千年に渡る後世の人々に投げかけている、つまり移り変わる世の中を経て諸行無常を体感した人ならば若沖の心を絵から理解できるという意味である。もう一つは、時代が変わり若沖の自由で創造力に富んだ考えを持つことが一般的になれば若沖なる人間を理解できるという意味である。

5.2 忘れられていた絵師若沖

若沖は長らく世間に忘れられていた絵師である。なぜ忘れられたのだろうか。まず、江戸時代の文化を元禄文化と化政文化の二大文化として学校で教えることで、若沖はどちら

にも属さず、歴史の授業で取り上げられることがなかった。また、明治以降に美術史を体系化するための整理がなされた時に、流派に属さなかった若沖の絵を分類できず、美術史からはじかれた。だから、若沖は学校では教えられないことのない存在になってしまった。このことは「4.4 若沖の知名度」で実施したアンケートで、中期の絵師を習った覚えはほとんどなく、知らない人が多かったという結果に裏付けされている。

さらに無欲な若沖は絵の技術の継承を望まず、一匹狼の研究者であり続けたため、「若沖派」の絵師は生まれなかった。代表作の『動植綵絵』は宮内庁で管理され、長い間人目に触れずにしまわれてきた。他の作品も寺院に奉納されたり、個人に譲られたりして、多くの人に鑑賞されることがなかった。これらのことにより、若沖の没後、彼の絵は長らく人の注目を集める表舞台から姿を消していた。

5.3 新たな疑問と課題

江戸絵画を調べる中で白隠慧鶴という禅僧を知った。白隠は若沖より30歳年上で禅画の絵師でもあった。禅画は水墨画から発して坊主や達磨を描いたもので日本の公的美術史とは無縁であり白隠はアマチュア絵師だったが、江戸中期に京都で活躍した絵師達にとってイメージの源泉となった絵を描いた人物として評価されている（西田, 2007, p.134）。白隠と若沖の人物像には類似する点が幾つかある（表2）。

表2 若沖と白隠の類似点

項目	若 沖	白 隠
立場	禅僧（黄檗宗）	禅僧（臨済宗）
絵師としての立場	アマチュア絵師	アマチュア絵師
描く絵のジャンル	流派に属さないオリジナル	禅画（公的美術史と無縁）
絵師としての姿勢	自己流・因習に囚われない	我が道を行く
影響を与えた/与えられた	禅画に影響を与えられた	中期の絵師に影響を与えた

白隠が修行者に向けて行った禅問答に「隻手声有り、その声を聞け」がある。これは「両手を打ち合わせると音がするが、片手ではどんな音がしたのか」という問いであり、意味するところは、音や声は耳で聞くものという固定観念を捨てて音声を心で受け止めよという論しである。理屈や分別に固執して常識に囚われ凝り固まる状態を戒める言葉として、今に伝えられている。この問答を若沖が聞いたかどうかは不明だが、絵師としての当時の当たり前を捨て、自分の目や心でものを見て感じたままに表現するための努力を重ねる若沖の姿は、白隠の論しを実践したかのように見える。

駿河にいた白隠と京都の若沖に接点があったかどうか不明であるが、二人の類似点が偶然のものでないなら、二人の関係性はどのようなものであったのだろうか。若沖についてさらに理解を深めるための今後の課題としたい。

6. 結 論

本研究を通じて、これまであまり知られていなかった伊藤若沖という絵師の作品や人物像に触れることができた。若沖は流派や形式に囚われることなく、自分の信念に基づいて自分の力で進んでいく絵師であった。独創的な絵画技法に加えて、自由さや高い観察力、

創造力を駆使した作品はどれも迫力にあふれ、300年という時間や流行を超えて私たち後世の人間にも強く訴えかけるものであった。

素晴らしい作品を多く生み出した若冲であるが、同時代に活躍した絵師と比べて知名度が低いことも事実であるようだ。本研究ではその理由についても考察したが、様々な意味で「大勢（たいせい）」に属さなかったことが大きな要因であろう。時代背景としては江戸時代の二大文化とされる元禄文化、化政文化のいずれにも属さなかったこと、また美術的な観点からは独自の技法に邁進し特定の流派に属さなかったためその扱いが定まらなかったことが挙げられる。だが、同時期に同様の素晴らしい活躍をしても、様々な理由によってその評価や評判に大きな差異が生まれるという事実にとりついたら、少し考えさせられるものがあった。私たちの日々の生活は世間的な評価や評判に大きく影響されているが、その評価や評判が必ずしも全ての事柄を勘案した上でなされていないのではないだろうか。また、評価が高くないものにも目を向けて自分で評価できる価値基準をもつことが大切なのではないだろうか。

今、若冲は絵師として注目を浴びるようになった。やっと正当な評価を得たことは喜ばしいことである。絵の素晴らしさを認められるのは当然であろうが、人気を集めている理由は、若冲の因習に縛られない自由な生き方が現在の日本に通じ共感されるからであろう。若冲の人間としての感覚が現代人にとっても近いからとも言えるだろう。人目に触れなかった期間があった分、若冲の絵は時を経て熟成した酒のように人々を魅了しているのかも知れない。

参考文献

NHK番組『若冲 天才絵師の謎に迫る』（2016年4月24日視聴）

加藤泰夫著（2011）『もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品』東京美術。

「最新の科学で絵師伊藤若冲の作品の秘密に迫る」

<http://www.bell.jp/pancho/k_diary-18/2016_04_30.htm>（2016年8月3日アクセス）

辻惟雄著（2004）『奇想の系譜』筑摩書房。

西田裕一著（2007）『江戸絵画入門 驚くべき奇才たちの時代』平凡社。

花塚久美子（2010）『若冲の衝撃』小学館。

吉田晃子編（2016）『芸術新潮(2016年5月号)』新潮社。